

富永神社祭礼奉納

とき 平成四年十月九日(金)
午後四時三〇分始
ところ 富永神社 能楽殿

能

組

狂言 口真似

太郎冠者 今泉 富美子

主 関谷 陽子
客 柿野 浩見

狂言 舎弟

弟前原 祐介

兄 伊藤 順一朗
助手 山田 真史

能
百 萬
シテ 鈴木 肇
子方 太田 温子

ワキ 森田 收
間 松井 平

大鼓 河村 総一郎 大鼓 鈴木 崇史
小鼓 福井 啓次郎 苗 今泉 英三

後見 竹内 三郎

地謡
中嶋 康夫 田中 洋二
鈴木 洋一 高林 呻二
水谷 清 高林 白牛二
竹内 省吾 太田 康弘

狂言 雁 礫

大名 安形 忠久
通行人 加藤 賢一
仲裁人 権田 重紘

休憩 三〇分

舞囃子 羽衣

太田 康弘 大鼓 清水 利高 大鼓 鈴木 崇史
小鼓 森田 收 苗 今泉 英三

地謡
鈴木 洋一 鈴木 木肇
田中 洋二 高林 白牛二
中嶋 康夫 高林 呻二

独調 東

北

高林 白牛口二 小鼓 今岡 アイ子

狂言花折

新発意 水谷至男

住持 酒井 元之助
花見客 佐野 正己
" " " " 大原 正己
" " " " 山口 俊一
" " " " 小林 常男
山本 憲吉

能 黒塚

後シテ 今泉 英三
前シテ 太田 康弘

ワキ 鈴木 肇

ツレ 竹内 三郎

間 畑中 良雄

大鼓 清水 利高
小鼓 永田 六兵衛
大鼓 中嶋 康夫
笛 鹿取 希世

後見 鈴木 洋一
鈴木 崇史

地謡 竹内 省吾 森田 收
田中 洋二 高林 白牛
水谷 清 高林 伸二

附祝言

(終了予定 九時三〇分頃)

主催 新城能楽社中
本町区

あらずじ

狂言 口真似くちまね

知人から酒、肴を貰った主、程よい相手を連れて来る様にと太郎冠者に言い付けます。ところが連れて来たのは、評判の酒乱の男。一計を案じた主人は太郎冠者に、自分の言うように真似をせよと言ひ付けます……

狂言 舎弟しやてい

親から貰った名前があるのに、兄からいつも舎弟と呼ばれていた弟、ふと舎弟と言ふことばの意味に不審を抱き早速ものしりの某に尋ねます。某はいたづら心で舎弟とは盗人の事だと教えます。そこで腹の立てた弟が兄の処へまいりまして……

能 百萬ひやくまん

京都嵯峨野清涼寺の境内で三月、大念仏が行われているので近在はもとより遠国からの善男善女でいっぱいです。そこへ大和吉野あたりの男が幼い子の手をひいてやって来ます。

男は奈良でこの子を拾ったのですが今日は大念仏の賑いを見せて幼子を慰めてやるつもりなのです。門前の男に何か面白い見せ物はないかと聞くと、百萬とよばれる物狂が面白がるうといい、彼女を呼び出すには念仏を下手クソに唱えればよいとて、わざとふざけて念仏を唱えます。すると案の定かの百萬が人ごみの中から出て来て門前の男の悪念仏を嘲り、自分が音頭をとろうとて「南無阿弥蛇仏」の称号を上手にとえ、人の一生を煩惱の重荷を積んだ車を轆く姿にたとえ阿弥陀如来の力を借りて轆いてゆくとを面白く演じて見せます。狂気の者と笑われながらなお信心するのは、別れた我が子に逢いたい一心であると言懐します。

彼女は群衆のなかにその姿を追いもとめ狂乱の態となります。吉野の男はあまりの哀れさに幼子を百万に引き合せてみます。百万は母子が再会出来たことは有り難い弘法の力によるものと、喜んで可愛い我が子の手をひいて故郷の奈良の都に帰って行きます。

狂言 雁磔がんつぶて

狩り好きな大名、今日も野に狩りに行きます。雁が野に降りているのを見付け弓を射る支度をしします。そこへ通りがかりの者がつぶてて雁を打ち取って、持って行くとうします。雁を射ようとした大名は、大変怒り通りがかりの者と争いになります。目代が来て両者の争いの仲裁をします……

狂言 花折はなおり

連日の日和に恵まれた春の一日、下京辺の若者が花見に西山の寺を訪ねたところ住持が不在で、その上花見禁制になったと云って留守を預かる新発意に断られます。止むなく外から花を眺め酒宴となりましたが、酒好きの新発意は、外から聞こえる謡の声に誘われて、ついつい中に入れてしまいます……

「新発意 しんぼち とは出家して問のないものです」

那智の東光坊の阿闍梨祐慶は諸願成就のため全国を行脚していますが日数を重ね陸奥国安達ヶ原へ辿り着きます。日も暮れましたので今宵の泊りをどうしたらよいものかと案じていますと火の光がみえるのでその家に立寄り宿を乞います。家には女主人がただ一人住んで家の内があまりに見苦しいからといって宿を断りますが行くあてもない山伏を憐れんで庵の扉をあけて招じ入れてくれます。

やがて女主人は夜寒を凌ぐため、裏山へ薪をとりに行きますがその留守に部屋をのぞくなどいわれた禁を破って祐慶の従者が闇の中をのぞくと、おびただしい人の屍が積み重なり血が一面に流れまるで地獄の有様、さては鬼の住家であったかと肝をつぶし足にまかせて逃げてゆきます。さきほどの女は約束を破られた恨みに鬼女の本性をあらわし、喰い殺そうと追ってきますが祐慶の必死の調伏に屈して次第に魔力も弱まり夜嵐にまぎれて消え失せてしまいました。

前場はむしろ秋の夜の物わびしさ、人の世のはかなさを表現することに重点を置かれ、後場はおそろしい鬼女と山伏とのたたかい、「動」に転換されこの対比の面白さこそが本曲の醍醐味といふべきです。

新城の能楽の沿革

新城の能楽は天正三年（一五七五年）長篠の戦いの功によって奥平信昌が当地に城を築き、翌天正四年その竣工の祝能を勸世与三郎（後の九世親世右近太夫）を招いて城中二の丸で行った。これが当地の能楽の始めである。

その後、慶安元年に丹波の亀山から菅沼定実が当地へ移封されたが風流な城主で桜測を開発され、特に能楽を愛好し町民の間にも普及してさかんに行われるようになった。この二代後の定用の家督を祝って元文元年（一七三六年）富永神社の祭礼に本町の氏子が能楽を奉納した。これが例となり年々祭礼能を奉納し、新城能楽社として親から子へ、子から孫へと連綿として今日まで継承され市の無形文化財に指定されている。

尚、新城市文化協会主催で平成二年より「新城薪能」を新城文化会館はなのき広場において演能されておりす。

新城能楽社中は、数多くの能面、能装束を所蔵している。

このたび、社中所蔵の装束と面が東京の国立能楽堂において十一月四日より展示されます。従って本年の装束の展示は中止致します。